

【MACF 礼拝説教要旨】

2024年5月5日

ヘブライ人への手紙7章

1 このメルキゼデクはサレムの王であり、いと高き神の祭司でしたが、王たちを滅ぼして戻って来たアブラハムを出迎え、そして祝福しました。

2 アブラハムは、メルキゼデクにすべてのものの十分の一を分け与えました。メルキゼデクという名の意味は、まず「義の王」、次に「サレムの王」、つまり「平和の王」です。

3 彼には父もなく、母もなく、系図もなく、また、生涯の初めもなく、命の終わりもなく、神の子に似た者であって、永遠に祭司です。

....

18 その結果、一方では、以前の掟が、その弱く無益なために廃止されました

19 律法が何一つ完全なものにできなかったからです。

しかし、他方では、もっと優れた希望がもたらされました。わたしたちは、この希望によって神に近づくのです。

20 また、これは誓いによらないで行われたものではありません。レビの系統の祭司たちは、誓いによらないで祭司になっているのですが、

21 この方は、誓いによって祭司とられたのです。神はこの方に対してこう言われました。

「主はこう誓われ、

その御心を変えられることはない。

『あなたこそ、永遠に祭司である。』」

22 このようにして、イエスはいっそう優れた契約の保証とられたのです。

23 また、レビの系統の祭司たちの場合には、

死というものがあるので、務めをいつまでも続けることができず、多くの人たちが祭司に任命されました。

24 しかし、イエスは永遠に生きているので、変わる事のない祭司職を持っておられるのです。

25 それでまた、この方は常に生きていて、

人々のために執り成しておられるので、御自身を通して神に近づく人たちを、完全に救うことができになります。

26 このように聖であり、罪なく、汚れなく、罪人から離され、もろもろの天よりも高くされている大祭司こそ、わたしたちにとって必要な方なのです。

27 この方は、ほかの大祭司たちのように、

まず自分の罪のため、次に民の罪のために毎日いけにえを献げる必要はありません。

というのは、このいけにえはただ一度、御自身を献げることによって、成し遂げられたからです。

28 律法は弱さを持った人間を大祭司に任命しますが、律法の後になされた誓いの御言葉は、永遠に完全な者とされておられる御子を大祭司としたのです。

メルキゼデクという祭司が登場するのですが、この方は創世記の中のアブラハムの

出来事の中にきわめて唐突に登場します。それはまるでイエスさまの予告のような意味を含んでいます。

2 アブラハムは、メルキゼデクにすべてのものの十分の一を分け与えました。メルキゼデクという名の意味は、まず「義の王」、次に「サレムの王」、つまり「平和の王」です。

3 彼には父もなく、母もなく、系図もなく、また、生涯の初めもなく、命の終わりもなく、神の子に似た者であって、永遠に祭司です。

この祭司メルキゼデクは「義の王」「平和の王」と呼ばれており、どこの出身なのかという背景の方なのかわからないのですが、アブラハムはこの方を礼拝し10分の1を捧げています。

しかも、まだモーセによる律法も、また祭司制度も確立していない時代です。神様の直接的な介入と理解しないと、話が見えてこないのです。

メルキゼデクは永遠の祭司として神からの使命を直接受けており、その存在は神の子に似たものと言われています。

「永遠の祭司」と言われているからには、モーセの律法によって制定された期間限定の人間的な祭司とは大きく異なる面を持っています。

人間的な、組織的国家的意味での祭司はレビ族から選ばれました。

これは世襲制であり人間的な習慣化によって継続されました。

しかも、人間ですから祭司自らのために犠牲を捧げる必要がありましたし年齢が過ぎれば、当然、あとの人に引き継がれなければなりませんでした。

人間的な弱さや失敗もありました。そして、時に祭司は神の心をしっかり悟って神様に従うべきでしたが、いわば国家権力に寄り添う形で「権力者」の側に立つことが多くなっていきました。

つまり、祭司の存在と祈りと執りなしが、人を救うことができないものとして形骸化していったのです。

形は残っているけれど、そこには本当の永続的な神の救いがもたらされないとなると絶望的な意識になります。

神殿が壊されたり、捕囚になってよその国に連れて行かれたりした時、人間的な肩書を持っている祭司はまったく役に立ちませんでした。

しかし、神様は、そういう状況の中にも希望を提供しておられるのです。

以下の言葉はしっかり心に止めておくべき言葉です。

23 また、レビの系統の祭司たちの場合には、

死というものがあるので、務めをいつまでも続けることができず、多くの人たちが祭司に任命されました。

24 しかし、イエスは永遠に生きているので、変わることもない祭司職を持っておられるのです。

25 それでまた、この方は常に生きていて、人々のために執り成しておられるので、

御自分を通して神に近づく人たちを、完全に救うことがおできになります。

26 このように聖であり、罪なく、汚れなく、罪人から離され、もろもろの天よりも高くされている大祭司こそ、わたしたちにとって必要な方なのです。

27 この方は、ほかの大祭司たちのように、まず自分の罪のため、次に民の罪のために毎日いけにえを献げる必要はありません。

というのは、このいけにえはただ一度、御自身を献げることによって、成し遂げられたからです。

28 律法は弱さを持った人間を大祭司に任命しますが、律法の後になされた誓いの御言葉は、永遠に完全な者とされておられる御子を大祭司としたのです。

メルキゼデクが、そういう人間的な束縛から一切自由であったようにキリストも永遠に生きておられる祭司であり、どんな状況の中でも人を救うことができる存在であり、罪の赦しと、神からの命の希望をもたらすことができるのです。

当時、宗教的には形式がしっかり残されており、祭司を中心にしたピラミッド型の社会が成立していたのですが、その祭司や宗教指導者たちが、欠けだらけの人間であり人と神とを完全に和解させることができず、罪の赦しをもたらすことができない人たちであることは誰の目にも明らかでした。でも、習慣や伝統を重んじている人にとってはそれ以外のところに救いを信じるのがとても難しかったと思います。

ヘブライ人への記者は、あのメルキゼデクがアブラハムから捧げ物を受け取った義の王平和の王、永遠の祭司だったように、イエス・キリストも十字架の死と復活を通して永遠の大祭司の役目を果たすことができるのだと名言しているのです。

私たちには素晴らしい説教者、すばらしい牧師、すばらしい賛美者がいてくれることは嬉しいことですが、残念ながらみなさん、人間なので、老いていき、完全に若さや鮮度を保ち続けることができません。

ただイエス・キリストだけがみ言葉により私たちに赦しと希望をもたらす祭司として常に、あなたといってください。

私たちは「イエスさま」と結ばれて生きていくことが重要なのです。

この大祭司と一緒に歩めることが安心なのです。

人間のあらゆる組織は古びてゆき、歪んでいきます。

大祭司イエスさまとつながっていることだけが希望の源泉なのです。

いろいろなことで絶望したくなったり、幻滅したくなったりするとき、

永遠の大祭司イエスさまを拠り所とし、感謝し礼拝をささげてください。

そこにこそ希望と生きる力の源があるからです。

* * * *

Youtube での礼拝映像は <https://youtu.be/IBTvgrR1sYw>